「お富の貞操」への道程――〈貞操〉のゆくえ――

中田睦美

一

芥川龍之介が〈貞操〉に関する素材を最初に採り上げた作品は「袈裟と盛遠」（大7・4「中央公論」）である。周知のようにこの作品は「源平盛衰記」第十九の文覚発信に材を得ており、盛遠に横恋慕された袈裟が夫・渡に対する貞節を守るため、夫に扮して身代りとなり、命を落とすという筋である。芥川は、こうした〈貞女の物語〉の枠組みを借りながら、内実を袈裟の美貌の衰えを契機とする女と男（袈裟と盛遠）の微妙な意識の変化や女の自死ないし男の殺意の動機を内省する心理劇とした。物語の鍵は人妻の貞節にあるとはいえ、いわゆる〈貞操〉問題、すなわち姦通や不貞をはらむドラマではなく、男女における存在理由の差異を問う内容となっている(1)。

それから約半年後、芥川は「開化の良人」（大8・2「中外」）と題する一編を発表する。これは枠組みを〈貞女の物語〉にとった「袈裟と盛遠」と異なり、人妻の不貞すなわち〈貞操〉問題を主眼としている。物語は本多子爵が古い友人の三浦直樹とその妻にまつわる昔話を「私」に語るというスタイルである。常々「愛のない結婚」を拒んでいた理想主義者の三浦が、本多の韓国赴任中に商人の娘である藤井勝美と結婚する。従来の冷静な学者肌にも似つかぬ快活な調子の便りを受け取った本多は、三浦の幸せな結婚生活を想像していたが、一年後、帰国してみると、三浦の表情は沈鬱であった。勝美夫人の動静をうかがうと、その背後には従弟と称する男の影が揺曳し、やがて夫人の不貞が明白となったので本多は離縁を進めるが三浦は承諾しない。その理由は、夫人を誘惑した男の気持ちはどうあれ、夫人の心は純粋な「愛」かもしれない、というものだった。だが、夫人には別の男の影も見え、結局、三浦は離縁を決断する……。

上述の梗概に明らかなように、「開化の良人」はもっぱら妻に不貞された夫（男性＝三浦）の内面だけが照射される。作中には勝美夫人の具体的な言葉がないばかりか、彼女の内面に言及する叙述もなく、女性の不貞が男性側の視点に立つ一方的なまなざしのみで語られる。つまり、「愛のある結婚」を望んだ三浦の理想的主義的な理念が実際の結婚生活で妻の不貞のために瓦解してゆく悲哀（観念と現実の相反ないし乖離）ばかりが焦点化される。作家の筆も、三浦夫妻の生活実態がどうであったのか、また、女性（勝美夫人）の内面や彼女がなぜ不貞に走ったのかなどに全く踏み込もうとしない。要するに「開化の良人」における〈貞操〉問題とは、女性の不貞によって被害者的存在となった男性の無辜の内面が一方的にクローズアップされるだけで、結果として男性本位の保守的な結婚観によって矮小化された女性を見下ろすまなざしが露呈している。

ところで、作中に本多が友人のドクトルと「於伝仮名書（おでんのかなぶみ）をやってゐる新富座を見物」した際に勝美夫人を見かける場面がある。夫人の隣りには「楢山の女権論者」と呼ばれる「盛に男女同権を主張した、兎角如何はしい風評が絶えた事のない」「代言人の細君」が同席しており、夫人の不貞（自由恋愛）を扇動したと覚しき存在として描かれている。当日の演目は仮名垣魯文らの実録物(2)を参照した河竹黙阿弥脚色の「綴合於伝仮名書」（明12・5、新富座初演）であり(3)、〈毒婦〉として名高い高橋お伝をモデルとする物語である。お伝は夫の病死後、妾や街娼となり、やくざと同棲して困窮し、古物商後藤吉蔵と同衾したのち彼を殺害して金を奪ったとされる。多くの男がその肉体を通過した女の波乱に富む行跡は、好奇の目を集める扇情的な読み物として新聞紙上にも連載され、彼女の名は〈毒婦〉として広く喧伝された。この著名な〈毒婦〉と「風評」の絶えない「女権論者」という取り合わせには、「女権論者」に対する芥川の冷淡なまなざしがうかがえるが、そうした「女権論者」のイメージはどこから得られたのだろうか。

作中の「女権論者」が勝美夫人の〈不貞＝自由恋愛〉を扇動したらしい気配や「盛に男女同権を主張した」という叙述から推察すると、四、五年前の「青鞜」同人たちを中心とする〈貞操論争〉あたりから連想されたのは想像に難くない。

論争は雑誌「反響」（大3・9）に発表された生田花世の「食べることと貞操と」を発端とする。そこで生田は職場の上司に処女を奪われたことを告白、弟を養いつつ自分も食べてゆくには貞操（処女）を捨てるのもやむを得ないと述べた。「反響」は、当初、生田長江と森田草平の共同編集にな

る雑誌であった。森田は、平塚雷鳥との心中を企てたいわゆる煤煙事件（明41・3）の当事者として事件を報じる新聞の厳しいバッシングをうけ、翌年（明42）に連載した小説「煤煙」でも物議をかもした。それとともに、芥川にとっては師漱石に対する兄弟子であり、森田の作品「煤煙」「自叙伝」「輪廻」なども読んで(4)周知の名だった。貞操論争は、「反響」誌上の生田文に対し、安田（原田）皐月が貞操は女のすべてだと反論、伊藤野枝は女子に貞操が必要なら男子にも必要なはずとし、結婚は両人の愛によって定まるものだとして習俗の打破を訴え、雷鳥は処女を適当な時期にみずから捨てること、すなわち自己決定の重要性を強調し、形式的な結婚を批判した。この論争をうける形で、翌年（大4）九月には「讀賣新聞」が婦人附録で「生命か貞操か」を特集する(5)。こうした議論や事象は芥川の視野にも入っていたはずだが、何の反応も示してはいない。というのも、芥川の女性観が上記のような女性像と相容れないものだったからではあるまいか。当時の芥川の好ましい女性像は、たとえばやがて妻となる塚本文宛書簡中にうかがえる。

えらい女――小説をかく女や画をかく女や芝居をかく女や婦人会の幹部になつてゐる女や――は大抵にせものですえらがつてゐる馬鹿ですあんなものにかぶれてはいけませんつくろはずかざらず天然自然のままで正直に生きてゆく人間が人間としては一番上等な人間です（大5、推定）／安井婦人が文ちやんに幾分でも面白かつたのは何よりです（中略）安井夫人はえらいですね僕はああ云ふ人の方が、今の女学者よりどの位えらいか知れないと思ひます（大6・9・5）／大抵の事は文ちやんのすなほさと正直さで立派に治ります　それは僕が保証します世の中の事が万事利巧だけでうまく行くと思ふと大まちがひですよ、それより人間です　ほんとうに人間らしい正直な人間です　それが一番強いのです／この簡単な事実が、今の女の人には通じないのです　殊に金のある女と利巧な女とには通じないのです（大6・9・28）／時々不良の女みたいな女流作家や作家志望者に遇ふとしみじみ文ちやんがあんなでなくてよかつたと思ひます作家にはああ云ふ種類の女と結婚してゐる人が大ぜいあります　僕には気が知れません（大6・10・30）

結婚を控えた婚約中の甘さを差し引いても、当時の芥川の好ましい女性像の基本的な姿が家庭的な良妻賢母型だったことがうかがえる。事実、後年にも「私一人の好みを云へば、（中略）やはり、子供を育てたり裁縫したりする優しい牝の白狼が可い」(6)とも述べている。こうした女性観からすれば

「男女同権を主張」する「女権論者」の「青鞜」同人たちや、奔放な女流作家や女流画家、また「女学者」など、世間的に「利巧な女」は忌避の対象であったろう。不貞（自由恋愛）を指嗾する「女権論者」の背景に〈毒婦〉を重ねたのも、勝美夫人の不貞を紋切り型の一方的な男性的視点に終始したのも、芥川の男性優位の保守的な女性観がもたらす当然の帰結であった。したがって、「開化の良人」は、〈貞操〉問題を採り上げたとはいえ、テーマ的には切実さや掘り下げが浅く、人妻の不貞は興味本位の単なる素材にとどまる。「開化の良人」は、先行作「開化の殺人」（大7・7「中央公論」）の懐古的な〈開化〉の空気や奇譚の〈趣向〉を引き継いだにとどまり、〈貞操〉問題はリアリティの乏しい観念的な主題でしかなかった。

二

芥川自身、〈貞操〉問題に切実なリアリティがなかったためか、「開化の良人」以後、しばらくはそうした主題が作品の前面に浮上することはなかった。しかし、三年後の「藪の中」（大11・1「新潮」）において、切り口はやや異なるものの、突然、人妻の〈貞操〉にスポットが当てられることになる。

「藪の中」は、話の主筋を「今昔物語」巻二十九第二十三話「具妻行丹波国男於大江山被縛語」に仰ぎ、フランス十三世紀の散文物語（作者不詳）「ポンチュー伯の娘」やブラウニングの「指輪と本」、アンブローズ・ビアスの「月明かりの道」などの影響も指摘されている(7)。物語は、若い武士金沢武弘とその妻真砂が若狭の国へ向かう途中、山科の奥の藪の中で、盗人多襄丸の策略に騙され、夫武弘が木に縛りつけられている面前で真砂が多襄丸に手ごめにされ、翌朝、武弘の死体が発見されるというものである。作品の形式は事件の関係者の証言（陳述）が並記されるスタイルだが、当事者の述べる証言が食い違う（多襄丸は武弘と立ち会い後、自分が殺したと告白し、真砂は自分が刺したと語り、武弘は自刃したと述べる）ことから真相は謎に包まれる。

ここで「藪の中」を論ずるわけではないが、この問題作をめぐってはさまざまな証言や多くの議論や解釈がなされており、その一端を見直しておきたい。芥川の身近な存在では、小穴隆一(8)と瀧井孝作(9)に創作動機とかかわる証言がある。小穴は、自分の読んだ雑誌の王と王妃と画家の話をしたら、それを読み直した芥川がすぐに「藪の中」を書いたが、思い当たるのは一人の女をめぐる芥川と南部修太郎の関係に

ついて当時の「芥川のこころのなかをひとごとのやうに書いてゐる悲痛な作品」だとする。瀧井は、「今昔物語」の当該箇所を芥川に話したのは自分だと語り、南部との一件から芥川は「女のことで兜の内を見透かされた痛手を負つたが、兜を脱ごうとしたやうで」その気持ちを吐露したのが「藪の中」を書いた時分だったと述べている。ここで言及された問題の「女」とは芥川の関係した人妻秀しげ子を指すが、これについては後述する。

「藪の中」をめぐる論議のなかでも特に注目されるのは、文学に精通する三人の読み巧者（中村光夫・福田恆存・大岡昇平）による論争である。口火をきった中村は、「強制された性交によっても、女は相手に惹きつけられ」ることがあるという女性不信のテーマが「異常な事件によって破壊された夫婦間の愛情のもつれ」として描かれた作だが、構成上の乱れがあるとして否定的評価を下した(10)。これに対して、福田は一編の主題が「事実、或は真相といふものは、第三者にはつひに解らないものだ」というもので、「藪の中」はその主題を充分に描き得ていると反論した(11)。大岡は、作者の意図が「当事者の陳述を併置して、その間の矛盾と一致によって、緊張と緩和の交替を作り出すことに」あり、それを通して、「一人の女を争う二人の男、三角関係と呼ばれる男女間の永遠の葛藤」を主題とした作品として高く評価し、芥川を擁護した(12)。

「強制された性交」云々という中村のやや強引と思える読みにも全く根拠がないわけではない。それは「手ごめ」後の真砂の次のような言動や表情があるからである。

女は突然わたしの腕へ、気違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、――さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。（中略）〔私を残酷だと思ふのは〕あなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。（多襄丸の白状）

盗人は妻を手ごめにすると、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。（中略）自分の妻になる氣はないか？自分はいとしいと思へばこそ、大それた真似も働いたのだ、――（中略）／盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。（中略）妻は確かにかう云つた、――「では何處へでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）／「妻の罪はそれだけではない。（中略）妻は夢のやう

に、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたきり、杉の根のおれを指した。「あの人を殺して下さい」（巫女の口を借りたる死霊〔武弘〕の話）

真砂の「その一瞬間の、燃えるやうな瞳」や「うつとり」した顔や「夢のやう」な表情などがさしあたり中村論の論拠だろう。しかし、中村論のはるか以前、宮島新三郎の同時代評(13)がすでに同様の見解を示している。宮島は、死霊〔武弘〕の「観察」が「貞操を無上のものとしないで、男に手ごめにされたといふ是認を根拠とし」ており、多襄丸が「女に情の動いたといふ事實を是認して、自己を肯定してゐる」のに対し、「貞操本位に動いたと主張するのは、女自身である」ことなどから「貞操観念と色慾の情との錯綜混戦をにらんだ處」がこの作品の「動機」だと解釈し、「結婚問題とか婦人問題などを研究してゐるもの」の参考になると述べる。

「手ごめ」という男性による力づくの性行為はいうまでもなく暴力的な犯罪そのものでしかない。にもかかわらず、それが男女間のデリケートな問題として再構成されるのは、その背景に近代の家父長制的な男性優位の社会構造が存在し、その社会が醸成する女性を低く見るまなざしや、性的対象としても女性を男性の従属的存在として捉える意識が底流していたからである。男女間の性差における不均等は、たとえば旧刑法（明13、明40）の「姦通罪」で「有夫の婦」すなわち人妻（女性）だけが処罰の対象とされ、それが戦後（昭22）の法改正に至るまで継続していたことにも明らかである。とはいえ、そうした男性優位の歴史を厳しく批判する現代の性規範を性急に当てはめ、裁断するところに〈文学〉の問題はない。現に「開化の良人」や「藪の中」が書かれた大正期の結婚制度や夫婦関係では〈貞操〉観念はきわめて重いものであったし、それは家父長制を基盤とする家族国家観（国民は天皇の赤子）の核となる夫婦関係を護持するための倫理観として、いわば社会常識として深く浸透していたからである。ともあれ、芥川が「藪の中」で描いた男の女に対する「強制的な性交」（手ごめ）を契機とする〈貞操〉問題は、そうした当時の社会常識に一石を投じ、同時に女自身や二人の男の存在理由を根底から揺さぶる深刻な内面のドラマとなっている。それはかつて「開化の良人」に描かれた紋切り型の観念的な〈不貞〉と大きく異なり、作家自身の内面とも密接に交響するきわめてリアルなテーマだと感じられる。前述の小穴や瀧井の証言は鵜呑みにできないとしても、芥川の身辺に起きていた人間関係が〈貞操〉問題の急激な深化を促す契機だった可能性は否定できない。

小穴や瀧井が示唆する芥川と関係のあった人妻とは秀しげ子である[14]。二人の出会いは、大正八年六月十日、岩野泡鳴主宰の十日会で、以前からの会員であったしげ子を見かけた芥川は広津和郎を介して挨拶を交わす。翌十一日、芥川は書簡を添えて自身の創作集をしげ子に送った。二人は、同年九月十日に十日会で再会したのち、同月十五日、二十五日と個人的な逢瀬を重ねている。芥川は彼女を「愁人」と称して[15]思慕の念を募らせ、その後も同様の記述を繰り返したが、やがてその存在は大きな負担となり、大正十年前半の中国旅行を機に関係を断つことができたとされる。のちに芥川自身、小穴宛〈遺書〉の一節で以下のように述べている。

〔自分の生涯の中でも〕大事件だつたのは僕が二十九歳の時に□夫人と罪を犯したことである。僕は罪を犯したことに良心の呵責は感じてゐない。唯相手を選ばなかつた為に（□夫人の利己主義や動物的本能は実に甚だしいものである）僕の生存に不利を生じたことを少なからず後悔してゐる。

ところで、「藪の中」の創作動機に関わるとされるしげ子や南部との三角関係について細川正義[16]は「秀しげ子を巡る南部と芥川のいわゆる〈女性共有事件〉」と「藪の中」に関連して先の小穴証言をあげ、芥川は大正十一年になって「初めてその事を知ったらしい」とし、同年八月七日付、南部宛芥川書簡の一節「お互いに何の悪感も持つてゐない。その癖かう云ふ事になる」を引いている。引用の前段には「君の手紙は有難く讀んだ。君はあの手紙を書いて好い事をした。しかしもつと早く書いてくれるとなお好かつた」云々の一節があり、引用の直後は〔五十九字の削除〕を挟み「それだけは承知してゐてくれ給へ。交を絶つ絶たないは僕がきめるべき事ではない。君の判断に一任すべき事だ」云々と続いている。この文面からすると、芥川は何か重大な一件を南部からの手紙で初めて知らされ、それは「交を絶つ」ほどの深刻な問題であるところを見ると、南部としげ子の関係の告白以外には考えられない。だが、そうだとすると、芥川が二人の関係を知ったのは「藪の中」発表（大11・1）より半年以上も後ということになり、この三角関係が「藪の中」のモチーフだとする見解は成立しない。小穴や瀧井の証言は、芥川の死後約二十五年後のおぼろげな回想であり、その根拠も明確ではない。第一、芥川・しげ子・南部の関係にはもう一人重要な人物すなわち妻を寝取られたしげ子の〈夫〉秀文逸（工学士）が存在するわけで、厳密には四角関係といえる。小説が武弘・真砂・多襄丸の三角関係であることからすれば、南部との関係よりも、しげ子・夫・芥川の関係が相当す

るわけで、とりわけ真砂の〈貞操〉を問題とするなら〈夫〉の存在こそ重要であろう。しげ子と関係をもった芥川の脳裏には不貞をされた夫への複雑な思いがあって、それが武弘の心情に転移され、一方、その夫婦関係を犯した自身の姿を偽悪的に描いたのが多襄丸だったように思われる。「藪の中」における〈貞操〉問題は、そうした秀夫妻と自身との三角関係を自省・煩悶し、当事者として自己の内面を凝視するところから生まれた切実でリアルなテーマであった。

三

しげ子が、芥川との関係がありながら作家として格下の南部と関係をもったことに芥川のプライドはひどく傷ついたに違いない。それでなくともすでに熱は冷め、その存在が負担になっていたしげ子との関係は、上述のように大正十年前半の中国旅行をきっかけに途絶えている。そのためしげ子に関する煩悶も沈静化し、芥川における〈貞操〉問題の意識も大きく後退したと思われる。ところが、その約半年後、「お富の貞操」（大11・5、9「改造」）と題する一編が発表される。ただし、物語は少女の〈貞操〉が危機に瀕する場面はあるものの、危機がすぐに回避されると、あとは何事もなかったかのように後段（二）の大団円へと流れてゆく。ちなみに、ここでの〈貞操〉とは〈処女〉（純潔）の謂であって、人妻の不貞ではなく、それゆえ三角関係の複雑な情況がからむ〈貞操〉問題が追究されるわけでもない。にもかかわらず、なぜ芥川はタイトルに「貞操」の文字を含む、見方しだいではいささか生々しい刺激的な題名をもってきたのだろうか。

「お富の貞操」の約半年前、「藪の中」発表の前月に瀧井孝作の「良人の貞操」（大10・12「新潮」）と題する一編が発表されている。のちにその大半が『無限抱擁』（昭2・9、改造社）第三章の一節に吸収される短編で、若い夫婦と妻の母親が同居する三人暮らしの家庭が舞台である。妻は小説家らしき夫（彼）の帰宅が毎晩のように遅いことを気にかけている。胸を患っている妻はふだんから寝込みがちで夫婦の営みもままにならないため、夫が外の悪場所などで遊んでいるのではないかと疑い、嫉妬する。夫は友人の誘いにも乗らず、みずから出掛けても引き返し、書きかけの原稿を妻に示して「兎も角僕は外では何もないのだから」と告げると、妻は「あなたに限って、そんな事無いと思つてゐますワ」と答える。つまり、これは「開化の良人」や「藪の中」とは逆に、男性（夫）の〈貞操〉に焦点が当てられた物語なのである。

一般に「貞操」問題では、女性（人妻）の不貞が問われるのに対し、男（夫）の〈貞操〉が問われるという珍しいケースである。当時、人妻しげ子との不倫関係に頭を悩ませ、人妻真砂の〈貞操〉を疑う「藪の中」を執筆しかけていた芥川にとって、男（夫）の〈貞操〉を問うという逆のパターンは、むしろ芥川自身の行動を問いただす、虚をつかれる視点であり、その予期せぬ切り口が印象に残る作品であったろう。

瀧井孝作は、大正八年四月に芥川と出会って以後、頻繁に芥川宅を訪ねるようになり、小説に目を通してもらったりもしている。

ぼくの文筆生活への第一歩は、大正八年三月に、時事新報記者になつた。（中略）文芸欄の消息を集めるための文士や美術家を戸毎に訪問して歩いた。色々の人に会つてみた。芥川さんはぼくにすぐ俳句の話を持ち出したりして、話が面白くて、日曜毎には必ず田端へ行くやうになつた。そして芥川さんの創作熱に感化されてぼくも創作の文章をみてもらつたりした。（「文学的自叙伝」二「新潮」昭11・5）

以後、親密な交際や書簡のやりとり（芥川の瀧井宛書簡は少なくとも二十三通ある）が続き、句作では芥川が瀧井を「折柴（せっさい）先生」と呼んで師匠扱いし、二人は俳句談義や画談も交わしているが、二人の創作をめぐる対話の一端は瀧井宛芥川書簡にも見られる。

(1) 「新潮の僕の小説南部などとは品が違ふと思ふが如何　君の小説は果して白眉だつたではないか」（大9・8・9）……「僕の小説」は芥川「捨子」（「新潮」大9・8）、「南部」は芥川の「南京の基督」（「中央公論」大9・7）を酷評した月評「最近の創作を読む」（「東京日日新聞」）のことで芥川宛書簡の言及と異なることを「不快」と述べた一連のやりとり、「君の小説」は瀧井「祖父」（「新潮」大9・9）をさす。

(2) 「一体に今度の小説むづかしき漢字少からず　何卒校正が念を入れて頂きたし」（大9・12・6）……「今度の小説」は「秋山図」（「改造」大10・1）をさす。

(3) 「君の小説改造へ出て結構だつた　僕は六月号もとうとうすつぽかしてしまつた」（大11・5・26）……「君の小説」は瀧井「妹の問題」（「改造」六月号）を、「僕」のすっぽかした作品は「お富の貞操」の完結編（のち「改造」九月号）をさす。

上掲の書簡をみると、二人が互いの作品に注目し合っていたのは確実であり、その関係はきわめて親密であった。「良

人の貞操」執筆時に近い大正十年十月にも二通の書簡があり、特に(3)の一節は「お富の貞操」の執筆とも絡む瀧井作品への言及である。こうした情況を勘案すると、「お富の貞操」というやや大胆なタイトルが、瀧井の「良人の貞操」にヒントを得た可能性はきわめて高い。加えて、瀧井作品に見える「良人」の語はかつて芥川自身も「開化の良人」で用いており、その類縁からくる連想も働いて、瀧井作品の題名にちなむ「お富の貞操」のタイトルを着想したのではあるまいか。また、両作品がともに〈貞操〉の守られた物語であることも、そうした推測をたくましくさせる（傍点筆者）。

いまだ南部としげ子の関係を知らず、しげ子との関係も途絶えて一年以上が経過し、やや気持ちの軽くなっていたはずの芥川にとって、〈貞操〉問題はもはや重苦しいものではなかった。そこで危機を回避して〈貞操〉が守られる明るくピュアな物語が構想されたのではあるまいか。その先蹤となったのは約二年前に発表された同じ〈開化物〉である「舞踏会」（大9・1「新潮」）であろう。

「お富の貞操」の構成は、「舞踏会」と同様、物語の主筋である本編と後日譚の二章から成っており、その後日譚でヒロインの相手である男性の素性が明かされるという仕掛けも共通している。「舞踏会」の本編㈠で明子のダンスパートナーとなったフランス人海軍将校はジュリアン・ヴィオと名乗るが、後日譚㈡において青年作家によって「御菊夫人」を書いた有名作家のピエルロティの本名だったことが明かされる。「お富の貞操」では、本編で乞食とされる新公が後日譚では維新に功のあった顕官として正装姿の村上新三郎が行列に堂々と伍している。加えれば、明子のジュリアン・ヴィオその人に対する無垢な信頼感は、〈貞操〉の危機に遇いつつも新公が「唯の乞食ではない」ことをお富が「なぜかわかつてゐた」心情に通じており、両作品のヒロインがともに相手の男性に信をおいている点も共通しているといえよう。

四

物語は、明治元年五月の上野戦争開戦前日、近隣の住民がすべて退去し、空き家となった小間物店に始まる。そこに身を潜めていた乞食の新公が一匹の三毛猫を相手にひとりごちつつ、短銃の手入れをしていると、一人の若い女・お富が闖入してくる。面識のあった二人が言葉を交わすうち、彼女がこの家のお上さんの願いで猫を取り戻しにきたとわかる。新公がこのような場では若い女が襲われかねない危険を語ると、立腹したお富は新公を打ちすえようとし、揉み合いから

新公がお富を組み伏せると、彼女は帯に隠し持っていた剃刀で切りつける。すると、新公は懐から短銃を出し、猫に狙いを定め、その命と交換にお富の肉体を要求する。新公の要求に、彼女はふて腐れたように茶の間へ行って帯を解き出すが、新公は横たわったお富に冗談だと告げたあと、「肌身を任せると云へば、女の一生ぢや大変な事」なのに「猫の命と懸け替に」するのは「乱暴」すぎないかと尋ねると、お富は「唯あの時はああしないと、何だかすまない気がした」と答える。やがて一人残った新公は「今日だけは一本やられた」と呟く。以上が「一」で、その後、「二」に相当する後日譚が続く。明治二十三年三月の第三回内国博覧会の開会式当日、群衆の前を開会式帰りの顕紳たちの行列が通りかかり、子どもたちや夫と行列を見物していたお富は、立派な正装に身を包んだかつての新公の姿を見出し、「何か心の伸びるやるな氣がした」……。

こうした物語の内容を検討する前に、少し気になる点に触れておきたい。たとえば、物語の出発点は明治元年であるが、後日譚が明治二十三年の第三回内国博覧会では時間の経過がやや長過ぎるきらいはないだろうか。明治元年のお富が何歳かは不明だが、「若い女」で「召し使ひ」とあり、「堅太りの体つき」で「新しい桃や梨を聯想させ」、新公の性欲を刺激するからには、十六、七歳ぐらいと見るのが穏当だろう。だとすると、明治二十三年のお富は四十歳前後ということになるが、三人の子どもを産み、「老を齎した」ともあって、それなりに整合性はとれており、それ自体、特に問題があるわけではない。とはいえ、芥川は後段㈡の舞台としてなぜ「第三回内国博覧会」を選んだのだろうか。

「お富の貞操」冒頭シーンに関連して、妻文の弟塚本八洲宛書簡（大11・3・31）で芥川が次のような問い合わせをしたことが知られている。

どうか下の三項につき御祖母様に伺つた上二三日中に御返事して下さい。

㈠　明治元年五月十四日（上野戦争の前日）はやはり雨天だつたでせうか

㈡　雨天でないにしてもあの時分は雨降りつづきだつたやうに書いてありますが、上野界隈の町人たちが田舎の方へ落ちるのにはどう云ふ服装をしてゐたでせう？殊に私の知りたいのは足拵へです（中略）

㈢　上野界隈、今日で云へば伊藤松坂あたりから三橋へかけた町家の人々は遅くも戦争の前日には避難した事と思ひますがこれは間違ひありますまいか？念の為に伺いたいのです　皆面倒な質問ですがどうかよろしく

御返事下さいかう云ふ点判然しないと来月の小説にとりかゝれないのです

ディテールにこだわる芥川の創作姿勢があらわな文面だが、物語の始まりを時代が大きく転換する上野戦争前日に設定することは当初から決めていたことがわかる。悲惨な戦いが目前に迫る明治維新前日という歴史的な劇的緊張感と、一方、その背後で人知れず展開された小さくも真剣なお富と新公のドラマは、鮮やかな対照の妙を描き出している。

ただ、「お富の貞操」は右の書簡の翌月、雑誌「改造」五月号に発表されるものの、それは第「一」章のほぼ半分「一目に処女と感ずる、若若しい肉体を語つてゐた。」までであって、文末は「（未完）」と記された。掲載部分には、この状況での「若い女の一人歩き」の「危」うさや「冗談」まじりに新公が「妙な気を出したら」などの対話もなく、したがって、お富と新公の接触には進んでおらず、猫を標的としてお富の身体を差し出せる場面にもほど遠い。要するに、新公の前にお富が現れただけの段階で筆は止まり、物語の実質的な展開にはまったく及んでいない。続稿を含めた全体が一括発表されるのは、それから四ヵ月後の「改造」九月号である。いささか厳しい見方をすれば、この時の芥川には前掲の書簡に見える「明治元年五月十四日（上野戦争の前日）」の設定だけは決まっていたものの、その先の物語展開はおよそ定まっていなかったように思われる。ましてや物語の〈落ち〉ともいえる後段㈡の情景はいまだ見えておらず、それは想定外の材料との偶然の出合いから思い付かれたのではあるまいか。そして、その出合いが終幕の第三回内国勧業博覧会開会式終了後の行列の場面を生んだのではなかろうか。

内国勧業博覧会は、明治十年に第一回、続いて明治十四年に第二回が開催されており、場所はいずれも上野であった（ちなみに第四回は京都）。第二回では博覧会に合わせてジョサイア・コンドルの設計になる煉瓦造り二階建の建物が造成され、博覧会終了後には上野博物館の本館となり、翌年三月、明治天皇が行幸して開館式が行われている。

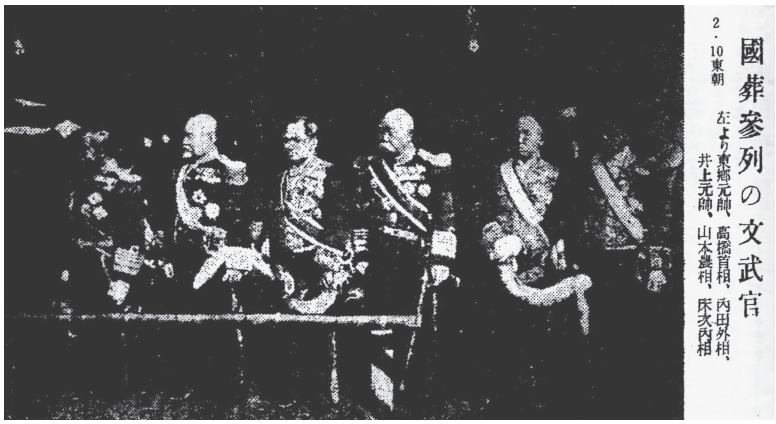
第三回内国博覧会は、「お富の貞操」にもあるように明治二十三年三月二十六日に明治天皇臨席のもと開会式が行われ、四月一日より一般入場が許された(17)。お富とその家族が出合わせたのはその開会式の帰りの行列である。明治二十五年生まれの芥川にとって、明治元年も同二十三年も誕生以前の歴史的事象であり、瞩目の光景ではない。ところで、第三回内国博覧会が開催された明治二十三年にはもう一つの大きな国家的イベントがあり、それは帝国議会が開設（同年十一月）されたことである。冒頭の明治元年の上野戦

争前日が明治維新の夜明けを告げる第一歩だとすれば、明治二十三年は実質的な近代国家体制の出発を告げる第二の維新ともいえる。直接には殖産興業を勧める内国博覧会に天皇がわざわざ行幸したのも、八ヶ月後に控える国会開設という第二の維新を遂行するための政治的プログラムの一環だったのかもしれない。明治元年と明治二十三年という構成がはからずも日本の近代化における二段階の維新を暗示するとして、芥川がそうした歴史的意味をどこまで意識していたかはわからない。

それにしても〈開化物〉の先行作品があるとはいえ、芥川はなぜ大正十一年に〈明治維新〉を強く印象づける物語を執筆したのか。たとえばそれは、物語の視覚的なハイライトとして、後段における行列のシーンがあげられるだろう。「二頭立ちの馬車」の中の新公を彩る誇らしげな「駝鳥の羽根の前立て」や「金モールの飾緒」や「勲章」や「名誉の標章」を一例とし、そうした細部からいかめしくも仰々しい行列の姿が思い浮かぶ。

芥川作品は、多くの場合、典拠となる材源が探索され、明らかにされている。しかし、「お富の貞操」に関してはこれといった材源の指摘がなされていない。むろん、芥川の独創的な物語であっても少しの不都合もないわけだが、あまり先行きの見えていなかったこの作品には、先述のごとく何か想定外の材料との偶然の出合いが会って、ラストシーンが着想されたとは考えられないだろうか。

たとえば、上述の晴れやかな行列シーンは、実はそれとは全く逆の葬列を反転させたものだとしたらどうだろう。実はこの年（大11）、明治維新の大立者二人が相次いで亡くなっている。大隈重信（一月十日没）と山縣有朋（二月一日没）だが、彼らの相次ぐ死は、それこそ「明治」の決定的な終幕を感じさせたであろう。このうち山縣が二月九日に国葬で送られている。霊柩は儀仗兵に守られて日比谷斎場と音羽護国寺を移動するが、「この盛な葬送の行列を見やうと集まつた人々は堵を作してゐる」と翌日の新聞（大11・2・10「讀賣新聞」）は伝える。また、別紙（大11・2・10「東京朝日新聞」）には東郷平八郎ら「国葬参列の文武官」の写真（下の掲出写真参照）が掲載されているが[18]、その礼装はあたかも新公の晴れがましい正装を連想させる。もしかすると、芥川はこの明治の終焉を象徴する盛大な葬列から「お富の貞操」における〈二段階の明治維新〉という物語の時代設定やラストのハイライトシーンを着想したのではないだろうか。



國葬參列の文武官

2・10東朝　左より東郷元帥、高橋首相、内田外相、井上元帥、山本蟲相、床次内相

さて、「お富の貞操」が提示する主題は、末尾近くの次の一節に明示されている。

彼女はあの日〔二十年以前の雨の日〕無分別にも、一匹の猫を救ふ為に、新公に体を任さうとした。その動機は何だつたか、――彼女はそれを知らなかつた。新公は亦さう云ふ羽目にも、彼女の投げ出した体には、指さへ触れる事を肯じなかつた。その動機はなんだつたか、――それも彼女は知らなかつた。が、知らないにも関らず、それらは皆お富には、当然すぎる程当然だつた。

新公の行動はさておき、第一義的な問題は、お富が「無分別」にも猫の命と引き換えに「女の一生」に「大変」な「肌身を任せる」（貞操＝純潔を捨てる）行動に出た事実で、その「動機」とはどのようなものだったかである。注目すべきはお富の身体の描写、すなわち「何処か新しい桃や梨を聯想させる美しさ」や「野蛮な美しさ」を感じさせる「一目に処女を感ずる、若若しい肉体」がきわめて丁寧に描写されていることである。お富の「無分別」な行動は、その処女性の顕著な「若若しい肉体」の「美しさ」にふさわしい清新でピュアな精神が瞬時に下した判断である。それは損得を量る社会常識や倫理的な是非やコトの後先を考える思慮分別などがいっさい入る余地のない、若さにのみ特権的な一回性の決断であるともいえよう。「動機」なるもののほとんどが、行動の結果、あとづけの論理から導き出されたもので、そこには大抵不純な要素が混入する。裏を返せば、純粋な行動とは「動機」すら入る余地のない「当然すぎる程当然」のごとく

なされる行動のことであり、それが可能なのは「若若しい肉体」と合致する若々しい清新な精神だけなのである。お富の〈貞操〉とは肉体の謂ではなく、若々しいピュアな精神が下した一回性の決断の意味であろう。秀しげ子との関係に揺れた芥川の〈貞操〉問題は、ここに至って、きわめて観念的な純粋精神のドラマに回収される。後年のお富が夫に向かって「活き活きと、嬉しそうに」「頬笑んで見せ」るのは、平凡な「炉辺の幸福」（「西方の人」）が芥川の思い描く幸福の形にほかならなかったからであろう。

【注】

(1) 浅野洋「『袈裟と盛遠』の可能性」（「近畿大学教養部紀要」昭62・3）参照。

(2) 『高橋阿伝夜叉譚』（明12年刊）

(3) 『芥川龍之介全集　第3巻』（昭42・1、筑摩書房）「注」参照。

(4) 「『輪廻』読後」（大12・9「女性」）

(5) 『日本女性史大辞典』（平20・1、吉川弘文館）ほか参照。

(6) 「お富と貞操」発表より三ヶ月前の一文「世の中と女」（大11・2「新家庭」）

(7) 『作品と資料　芥川龍之介』（昭59・3、双文社出版）の資料編参照。

(8) 「『藪の中』について」（昭25・11、「芸術新潮」）

(9) 「純潔――『藪の中』をめぐりて」（昭26・1「改造」）

(10) 「『藪の中』から」（昭45・6「すばる」）

(11) 「公開日誌――『藪の中』について」（昭45・10「文學界」）

(12) 「芥川龍之介を弁護する――事実と小説の間」（昭45・11「歴史と人物」）

(13) 「芥川龍之介氏『藪の中』その他」（大11・2「新潮」）

(14) 秀しげ子およびその周辺については拙稿「秀しげ子のために――Ⅰ――芥川龍之介との邂逅以前」（平8・12『論究日本文学』65号）ならびに「秀しげ子のために――Ⅱ――〈噂〉の女の足跡」（平10・5『論究日本文学』68号）による。

(15) 別稿「我鬼窟日録」（大8・9・12）

(16) 『芥川龍之介新辞典』（平15・12、翰林書房。「南部修太郎」の項）

(17) 国雄行『博覧会の時代　明治政府の博覧会政策』（平17・5、岩田書院）参照。

(18) 参考写真。